新潟応用地質研究会との出会い

熊谷　　忍*

30年と言う歳は何事によらず大きな区切りでありますが、応用地質研究会が発足以来ここに30周年を迎えたことは感慨に耐えない事であります。それと言うのも実はかく申す私にとっても色々な意味を持っているからなのですが。研究会の発足した昭和37年の暮に私はそれまで勤めていた鉱山が潰れて新潟へ舞い戻っていました。そして翌38年の年頭から新潟大学の地鉱教室に研究生として居候をしながら身の振り方について考えていたところでした。そんな時、発足したばかりの新潟応用地質研究会の例会が当時、西大畑にあった新大地鉱教室で開かれ偶然参加させていただいたのがこの会との出会いでした。

前年には松之山地すべりが発生したばかりの時で、当時砂防課の技師であった湊元さんのライナープレートによる集水井の話や、東港工業地帯建設のための地盤調査については工業振興課から民間へ転出したばかりの早川さん（元興和専務）の発表があったりで、私も早川さんの話しに出てくるN値と言う言葉の意味が判らず恥を忍んで質問をしたことなどを記憶しています。

私が現在のように建設産業の一郭に拘る仕事をするようになったのはこの後　年経ってからですが、鉱産業は壊滅し、代わって建設産業が台頭してくるという日本の社会構造の転機と私の人生の転機とがこの応用地質研究会との出会いを媒体として重なってくるのです。あの例会で初めて会った人達の多くの方々とはその後も永いお付き合いでお世話になっていますが、新潟地震を初めとした数々の地盤災害、建設プロジェクト。それらを題材とした例会や見学会そして会誌。新潟と言う土地柄は応用地質の話題に事欠きません。

しかしある頃、応用地質学会の下部組織にならないかという誘いがあり混乱したことがありました。新潟と言う地方の自主性、独自性は守ろうということになり、現在に至った訳ですが、正解だったと思います。

東京の一極集中に代表される中央集権化が強まる中で地方の自主性を守った良い例だと言えるでしょう。

30年の間に色々なことがあり、変わらぬ元気な顔もあれば故人となられた方もあり、しかし新しい若い人に引き継がれながら30周年を迎えることが出来たことを心から慶びながら、また自分自身の越し方に思いを馳せているところです。

---

* ㈱興和常務取締役、元副会長、評議員